

夏の思い出



熊野神社奉納仁和賀 前原地域



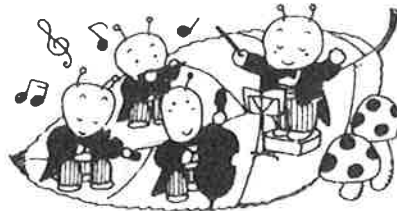
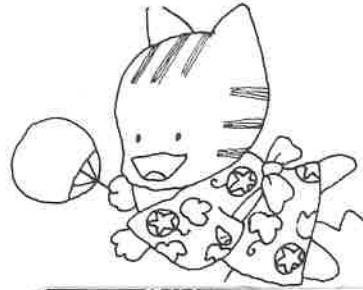
たむぎやま

平成24年
8月20日発行

新潟県
田麦山地区館



熊野神社奉納子供みこし



ブナ林コンサート



『靖国神社』

星野 恒治

終戦から三十年近くの年月が流れるとはや戦後の社会を語るなど殆ど聞かれなくなっていた。ところが昭和四十七年二月横井庄一がグアム島で量子に発見され救出された。このニュースは晴天の霹靂とばかりに日本中が驚きと称賛に湧いた。これが最後の帰還兵とみんなが歓迎したのであった。万歳！万歳！ところがその二年後の昭和四十九年二月、今度はフィリピンのルソン島で小野田寛郎が鈴木紀夫と密林の中で遭遇して無事帰国がかなえられた。救出時に救援隊とトラブルもあったが・・・

二度ある事は三度あるか？遺族の中にはもしかすると我が父、わが夫もルソン島の山中にまだ生存しているのではないかと思っただけではないだろうか。（口には出さねど目に涙）。

私の義母は（妻の母）も戦争未亡人の一人である。義母の夫は昭和二十年六月四日ルソン島のバレット峠で戦死している。「終戦後戦死扱いされながら外地で一生を終えた人が多勢いました」という横井庄一の証言がある。

戦後の行政の混乱で日本からの救援が遅れるうちに現地人と暮らし家族も増えとうとう帰国が不可能となってしまった人もいた。日本兵は器用で真面目であったから現地では評判が良かったという。中には酋長になったり村のリーダー格になり活躍していた報告もある。取り残された元日本兵も二つの祖国の狭間に立って、故国日本を思わない日は一日もなかったであろう。涙ぐましい丁史が横たわっている。

或る年の春、義母の希望で靖国神社へ案内した。東京だよお母さんの心で。

新緑の色濃い銀杏並木の参道の奥に靖国神社が厳かに建っている。どこからか軍歌のような低い歌声が聞こえてくる。義母は拝殿に向い恭しく頭を下げた。そして両手を合わせてじっと正面を見つめていた。



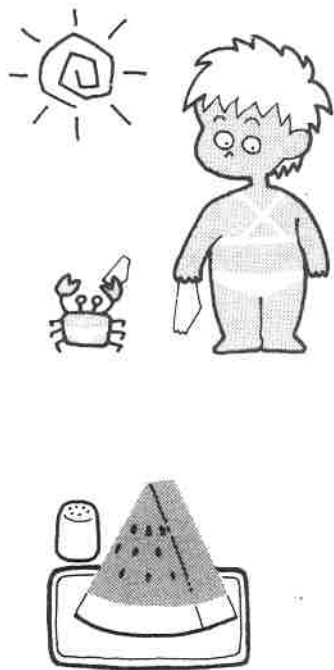
境内の記念館には戦闘機、大砲の実物が陳列されており、軍馬、軍用犬それに兵士の帰還を待つ母子像が建立されている。

好運にもその日は小野田寛郎の戦地での日用品が特別に展示されていた。鉄兜、飯盒、軍服、ナタ等色々の暮らしの道具が並び古びた襤褸まで並んでいた。

靖国神社に対する感情は人それぞれに異なる。地方から上京した観光バスが五・六台駐車して車体を光らせている。又長野ナンバーのワゴン車から入りてきた人は車椅子の人であるが静々と拝殿に向かって進んでいく。日本の遺族関係者にとって靖国神社は戦死者の慰霊の心静まる聖地となっているのだ。

義母は遺骨の入っていないお骨箱を受けた時よりの合祀されている靖国神社の参詣に長年の胸の問えがようやくとれたようであった。

境内の売店で「靖国神社参拝記念」に家族五人分の箸を買った。その箸を義母は大切そうに風呂敷に包んだ。亡き夫と家族つなぐ唯一の絆であるかのように胸にかかえて九段の鳥居を後にした。寂し気な後姿であったがフィリピン諸島の空に想いを馳せていたのだろうか表情は生き生きとしていた。靖国神社の軍歌とおぼしき合唱は軍歌ではなく近くの法政大学の校歌であったのだがその事は終生義母に語る事はなかった。



『パラリンピックへコーチとして参加』
日本代表ウエルチエアラグビーチームに米贈る

ロンドンオリンピックが終わりもう1つのスポーツの祭典パラリンピックが8月29日開催されます。

前原の涌井俊裕君（治郎兵エ）が日本ウエルチエアラグビーチーム（車イスラグビー）のコーチとしてパラリンピックに参加します。俊裕君は専門学校時代にラグビーのボランティアとして参加以来、新潟県チーム、全日本チームの活動を支援、いつの日かロンドンパラリンピックに参加することを目標に活動を続け、念願がなっってコーチとして参加が決まりました。

同チームへの健闘を祈念しファーム田麦山では魚沼産コシヒカリをプレゼントすることになりました。田麦山のコシヒカリを食べて活躍される事をお祈りいたします。



へおくやみ
八月二日 桜井 ヤス さん 九一歳
（前原 治兵エ）

謹んでご冥福をお祈りいたします。



編集後記

お盆の行事やお祭りに、参加された皆さん御苦労さまでした。

田んぼの稲穂も出そろい秋を迎えようとしています。まだまだ、残暑の厳しい日が続いていますので、体調には充分注意して過ごしましょう。